

早池峰岳流神楽の伝播と継承

— 白土・外山・学間沢神楽を事例に —

A case study of Transmission and Inheritance of Hayachinetake-ryu Kagura
— Shirotsuchi, Sotoyama and Gakumazawa Kagura —

千田 拓未 CHIDA Takumi

要 旨

北上高地の主峰早池峰山麓に位置する岩手県花巻市大迫町の岳・大償の2つの集落にそれぞれ岳神楽と大償神楽が伝承されている。大償神楽には1488年(長享2)の奥書のある『日本神楽之巻』、岳神楽には1595年(文禄4)銘の獅子頭が現存しており、成立より500年以上の年月が経過していることになる。この2つの神楽が廻村巡業により里の人々と関わりをもったことで、その流れを汲む弟子神楽は早池峰神楽が所在する花巻市大迫町を中心に県内各地に複数所在している。これらの神楽は「岳流」あるいは「大償流」を名乗り、この師弟関係が岳神楽と大償神楽の大きな特徴である。

本研究では、この弟子神楽の一例として岳神楽から伝授を受けた白土神楽(現花巻市東和町田瀬)と、白土神楽の弟子神楽にあたる外山神楽(遠野市小友町)、学間沢神楽(現奥州市江刺米里)を取り上げ、この3団体の師弟関係から、早池峰岳流神楽の伝播の仕方や継承の現状と課題について明らかにしたい。

キーワード：民俗芸能 早池峰神楽 伝播 継承

1. はじめに

岩手県には、様々な民俗芸能が信仰とともに地域に根付き、時代とともに様相を変えながらも現存している。岩手県教育委員会(2011)には、2009～2010年(平成21～22)に実施した岩手県内における民俗芸能の調査報告によれば、民俗芸能を継承する団体数は県内で1,126団体が調査でまとめられた。特に「神楽」と分類されるものは最も数が多く、401団体にもものぼることが報告されている。

岩手県教育委員会(1997)には、これらの神楽は、山伏神楽・大乗神楽・社風神楽・科白神楽・太神楽その他¹と分類されている。このうち山伏神楽の総数は201団体であり、その中でも広い分布を見せているのが早池峰神楽の流れを汲む神楽である。熊谷保・加藤俊夫(1998)では、江戸時代に伝承された芸能は、岳神楽の流れを汲むものとして201団体、また、大償神楽のうち田中系が3団体、斎部流野口家流式が6団体確認されている。これに明治以降に伝承された芸能を加え、さらに「幕神楽」²を演ずることができないが、「権現舞」³のみの芸能を加えると、100団体をはるかに超えるものと思われ

ると報告されている。岳神楽の研究として中嶋奈津子(2013)があり、岳神楽の弟子神楽がどのように広範囲に伝播し、なぜ神楽が維持されてきたのかについて詳細に報告している。しかし、広範囲で調査しているものの、中嶋の調査報告で触れられた弟子神楽が、全てではなく、実際には所在を特定できないものや、休止しているなどで調査ができなかったものが複数ある。また、岳神楽の代表的な弟子神楽についての調査報告がみられたが、岳神楽の孫弟子にあたる弟子神楽は充分になされていない。

それらを踏まえて本研究では、白土神楽とその弟子神楽である外山神楽、学間沢神楽についてとりあげる。その際、現地での聞き取り調査と資料調査を行い、3団体の現状と過去について検討することで、岳神楽の直弟子と孫弟子の師弟関係や、早池峰岳流神楽の伝播と継承の仕方についてあきらかにし、今後の民俗芸能の継承について模索する。

2. 概要

2-1. 早池峰神楽

本研究では早池峰神楽(岳・大償神楽)の伝播や継承に関わるが多いため、大元となる早池峰神楽について述べていく。久保田裕道(2000)には早池峰神楽の歴史や特徴について述べられているため、以下原文そのまま引用する。

岩手県の早池峰山麓に伝承される山伏神楽。一般的には稗貫郡大迫町内川目の大償と岳に伝承される大償神楽・岳神楽を指す。獅子頭を権現様と呼ぶ獅子神楽の一種で、能大成以前の要素を含むといわれるさまざまな舞も演じられる。この芸能が中央から東北地方にもたらされた時期は定かではないが、大償には1488年(長享2)の奥書のある『日本神楽之巻物』が存在し、岳の早池峰神社には1595年(文禄4)銘の獅子頭も保存されているために、中世末期には獅子を伴った神楽が執行されていたことがうかがえる。江戸期に記された『山蔭文書』によれば、大償・岳両神楽は大迫の田中神社より伝えられたとされ、現在でも両者は阿吽の関係とも兄弟関係ともいわれる。

上記のくだりからは、早池峰神楽が500年以上もの間伝承されてきた神楽であり、田中神社から岳、大償に伝えられたとわかる。

現在定期的上演されるのは、8月1日、岳の早池峰神社例大祭およびその前日の宵宮、また正月の舞初めが大償の1月2日、岳の1月3日となっている。しかし、かつては冬期に村々を巡業する通り神楽・廻り神楽が本来の上演形態であったといえる。秋の農作物の収穫・調製が終わったところから翌年2月ころにかけて旧内川目村内を1戸1戸廻って権現舞を行い、夜にはヤドを決めてさまざまな舞を舞った。舞手となるのはかつて大償・岳のおのおの決められた家の長男に限られていたという。また、この周辺には大償・岳から舞を伝授された弟子神楽も存在し、早池峰流を名乗る団体もある。そのほかに、遠野市や川井村など早池峰山周辺には数多くの山伏神楽が伝承されている。

上記のように、早池峰神楽は現存する史料から中世から権

現様と呼ばれる獅子頭を用いて踊られていた芸能で、冬期間には各村の民家を訪れ神楽を演じ、通り神楽や廻り神楽と呼ばれる巡業が行われていたのが特徴的である。さらに早池峰山の周辺の地域には岳・大償の弟子神楽や、山伏神楽が数多く伝承されていることがわかる。

2-2. 白土・外山・学間沢神楽について

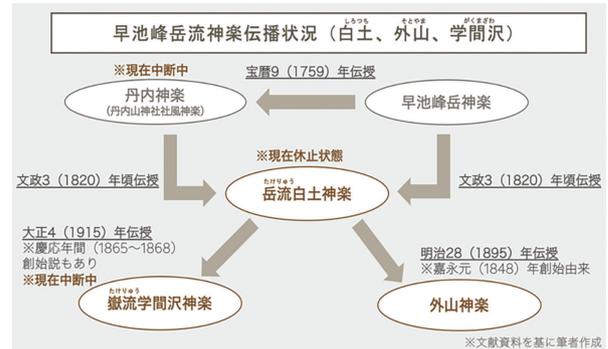


図1 早池峰岳流神楽伝播図(白土・外山・学間沢)筆者作成

図1は今回研究対象とする3団体の系譜と、それに関連する神楽団体をまとめたものである。これを踏まえて各団体の成立の詳細について述べる。

2-3. 白土神楽

白土神楽は、花巻市教育員会(2020)によれば、

東和町田瀬地区にある白土加茂神社の奉納神楽である。文政3年(1820)に、白土の菅谷鶴松がこの地域に門付けに来ていた岳神楽より伝承されたという。その後丹内神楽の弟子となつたらしいが、丹内神楽が社風流に改作後も、岳流と名乗っており、昭和初期まで岳神楽と交流があったという

とあり、白土神楽が、岳神楽と丹内神楽(丹内山神社社風神楽)⁴⁾の双方を師匠としていたことがわかる。筆者の2022年調査で、花巻市教育委員会に問い合わせたところ、送付された調書には、白土神楽は休止状態という旨で記載されていた。

2-4. 外山神楽

外山神楽は、遠野市立博物館(2002)によれば

文政年間(1818~1854)頃、外山集落には、菊池為友氏(たけとも)の家が庭元で神楽が行われていたが、嘉永年間(1848~

1854)頃に火災に遭い神楽の道具類が焼失したため、断絶したという。[中略]明治の初めに、集落の有志達が集まり、田瀬から白土神楽の師匠を招いて教えられ、再興したという。白土神楽は大迫町の早池峰岳神楽の系統である。嘉永元年(1848)の墨書のある権現様が現存する

とあり、江戸時代後期あたりには神楽が集落内で神楽が行われていたと伝わるが、火災で文書類や記録類が燃えてしまい、流派や創立時期が明らかでない。しかし、唯一の史料として1848年(嘉永元)の墨書がある権現様が現存するため、この頃には神楽が成立していたといえる。

2-5. 学間沢神楽

学間沢神楽について、江刺市教育委員会(1981)は、

一説によれば、万延の頃(1860頃)神楽を造り権現舞を舞った。その後、大正4年当地鎮座の白鳩八幡宮(元八幡神社)の祭礼を賑わし、神慮奉慰民心和楽を図るため、高橋万左エ門座元、千葉栄松世話人として、早池峰岳の直伝白土神楽(加茂神社奉納神楽)を師匠に伝授を受け、白鳩八幡宮奉納神楽になったものである

とあり、1860年頃(万延年間)に創始された説と1915年(大正4)創始説の2つがあるが、後者が白土神楽から正式に伝授されたとされている。筆者が2022年調査で奥州市教育委員会に問い合わせたところ、現在学間沢神楽は中断中であった。

3. 現地調査

3-1. 白土神楽の現状と課題

白土神楽は、保存会が組織されているが、2022年調査時点では、保存会長の阿部久穂氏(60代)と会員の菅原政二氏(60代)の2人のみである。2人とも60代のため、その下の世代がおらず神楽の継承が困難な状況にあった。白土地区にある加茂神社の例祭では、2人で御神楽奏上のみを奉納しており、権現舞など人数が必要となる演目ができない状況下にある。また、神楽道具については、白土神楽を創始した菅谷鶴松の子孫の家を庭元⁵とし、庭元の菅谷ミキ氏(80代)宅で現在も保管されている。菅谷家は元家と新築した家の2棟が敷地内に隣接しており、元家の座敷に神楽面や装束などが保管され、元家の管理とともに神楽道具の管理に困っていた。聞き

取り調査は先述した3名から行った。

3-2. 外山神楽の現状と課題

外山神楽は、2023年調査時点で保存会は15名で活動しており、地元の八坂神社例祭、巖龍神社例祭、遠野まつり等年間を通して活動している(写真2参照)。現在、演じることのできる演目として、鶏舞、翁舞、三番叟、八幡舞、岩戸開き、天降りの舞、天女の舞、潮汲みの舞、鞍馬の舞、権現舞などがある。近年、40年間演じられなかった天女の舞、潮汲みの舞、10年間演じていない翁舞の復活など、演目の復活に力を入れている。神楽道具の保管は、庭元である菊池秀雄氏(80代)が自宅で管理していたが、場所をとり生活の場に支障をきたしてしまうという理由で、5年ほど前に保存会へ寄贈がなされ、現在権現様2頭を除いて、公民館で保管をしている。2023年調査では、庭元の菊池秀雄氏、神楽師匠の菊池邦夫氏(80代)から聞き取りを行った。

3-3. 学間沢神楽の現状と課題

学間沢神楽は、2022年調査時点で中断中となっており、保存会組織も残っていない。庭元は、1915年(大正4)に初代庭元であった高橋万左エ門の曾孫にあたる高橋次雄氏(60代)であるが、現在家族とともに北上市へ移住しており、元家はほぼ空き家になっている。高橋氏は1ヶ月に1、2回程の頻度で元家に帰っている。神楽道具は高橋氏の敷地内にある蔵の2階に保管してあったが、現在は家の奥座敷に移動し、管理がしやすいように道具類を整えていた。また、学間沢集落では神楽の他にもかつて有志で芝居劇が行われており、神楽道具の他にも芝居で使用する幕や衣装が行李に収められていた。現地調査では庭元の高橋次雄氏のほかに、古老である住民の千葉清美氏(90代)から聞き取りを行った。

4. 岳神楽との接触

2023年の現地調査、文献資料により白土神楽と学間沢神楽において岳神楽との接触が見られた。白土神楽が伝承されている田瀬地域は過去に岳神楽が門付けに訪れた地域でもあった。中嶋(2013)によると、「庭元の祀神「観音様」の縁日に毎年岳神楽が来ていて、そのときに神楽も教えていた。戦中、人手不足による神楽の危機の際には、白土から岳まで神楽衆が出向いて神楽を一緒に舞った。そのときは米をもっていった。」と明治生まれの古老からの聞き取りがあった。

岳神楽と白土神楽が互いに交流を行い、神楽舞の伝授だけでなく戦中に師匠・岳神楽が危機の際には白土神楽から援助を行っており、確固たる師弟関係が築かれていたのがわかる。また、白土神楽の現地調査において岳神楽と同様の神楽道具の存在が明らかになった。写真1の神楽面は岳神楽と白土神楽の山の神面である。現白土神楽の神楽衆に岳神楽から譲り受けたものか尋ねたが、詳細については不明であった。しかし、双方の山の神面を比較すると細部まで表情が同じであり、岳神楽が門付けに来た際に譲り受けたと考えられる。

学間沢神楽において、江刺市教育員会(1981)には

- 昭和30年 早池峰岳神楽大先生を招き、3日間指導伝授を受ける
- 昭和31年 早池峰神社年越祭に参加
- 昭和36年 北海道函館市より招待、3日間公演
- 昭和51年 茨城県東茨城郡乗越神社祭典に招かれ、3日間公演

とあり、学間沢神楽の1955年(昭和30)～1976年(昭和50)代の行事が記載されていた。上記から岳神楽を招待し、指導伝授を受けた翌年に岳神楽の本場である早池峰神社の年越祭に参加しており、岳神楽との繋がりが見受けられた。聞き取りを行った千葉清美氏から「本家(屋号・補資場)で早池峰神楽が来て踊ったごどあったな。岳神楽な。栄進さんが呼んで八幡宮(白鳩八幡宮)でもやったっけ」と話しており、学間沢の白鳩八幡宮の祭典のほか、千葉清美氏の自家である千葉栄進宅で岳神楽が舞ったことを記憶していた。千葉清美氏が記憶していたのは1955年(昭和30)にあたと示唆



写真1 左から岳・白土神楽 山の神面 筆者撮影

される。しかし、1956年(昭和31)以降、岳神楽との関わりを示す、出来事が記載されていない。おそらく、1955年(昭和30)と1956年(昭和31)の2年しか交流が行われなかったといえる。これについて、当時千葉栄進氏が神職を務めていたことから⁶、岳早池峰神社の宮司と知り合う機会があり岳神楽を招待するように仕向けたのではないかと推測できる。1955年(昭和30)以前の、岳神楽との繋がりを示す証言や資料等の記録がみられなかったため、栄進氏の神職としての職務的な繋がりに、岳早池峰神社宮司を介して岳神楽を招待するに至ったと考えるのは妥当ではないか。1つの例として、北上市の夏油神楽があり、中嶋(2013)では「神楽をはじめた人が山仕事で岳の人と一緒にになったことで神楽を教わることができたと伝えられている」というような夏油神楽の保存会会長の証言があり、直接的な伝播や指導は個人と個人の結びつき、または、仕事柄の付き合いで神楽を教わっている事例もある。

5. 白土・外山・学間沢における交流

5-1. 外山神楽の史料より

3地域の現地調査で、神楽衆の交流が見受けられた。外山神楽においては、神楽史料から白土・学間沢神楽との繋がりがあきらかになった。外山神楽の現存で最古の資料としては、1848年(嘉永元)の墨書(写真2の右上の獅子頭)がある「権現様」とばれる獅子頭がある。現在外山神楽で使われている権現様は2頭あり、現在の庭元である菊池秀雄氏の自宅の床の間で安置されている。また、写真に写せなかったが、「田瀬村 菅原 七十三歳」の文字があり、田瀬の菅原と名乗る人によって製作された。白土神楽の調査の際に、白土神楽保存会・会長の阿部久穂氏は「白土は菅谷、菅原、多田の姓で構成されていて、神楽もこの家の人たちでやっていた」と話していた。これより、写真6の権現様を製作したのは、白土の菅原という人物に当たると推測される。おそらく、このあたりには地域同士での交流を介した、神楽同士の付き合いがあったといえる。

写真3は、白土神楽から伝授された神歌本で年号が不明である。外山は、元来袖山と表記され、「ソデヤマ」と呼ばれていたが、現在は「ソトヤマ」と呼ばれている。この神歌本に記されていた演目として^{みことぞろい こだいらりゅうおう}「尊掬、五大竜王、五穀舞、^{さんかんたいじ やしま あまくだり}三韓退治、八嶋、天降」の6つが記載されていた。時期は特定できないが、「袖山連中 田瀬白土より受たり」との記載が



写真2 外山神楽権現様（写真右の獅子頭に墨書あり）
2023年筆者撮影

あるため、白土神楽との関わりを証明する貴重な史料である。

写真4は、1967年（昭和42）2月11日に学間沢神楽の千葉栄進氏から外山神楽の菊池政雄氏へ贈られた神歌本である。この千葉という人物は、学間沢の白鳩八幡宮の宮司をしていたそうで、白土神楽の庭元の菅谷ミキ氏は「千葉栄進さんという人は聞いたことある。あの人は白鳩八幡宮の神官さんやっていたな」と述べ、学間沢神楽の庭元・高橋次雄氏や住民の千葉清美氏は「補資場（屋号）の栄進さんは白鳩八幡宮の神官やっていた」と話していた。さらに、外山神楽の菊池邦夫氏（80代）も「栄進さんが来ると、神楽踊るめえ（前）にも、かけまくもなんてやる人だったしよ。それで、神迎えの手叩きなんてよ、こんなごどさせられだりよ。ほーでねえ（覚えていない）どもよ今。祝詞あげてよ、今度神送りだなんて今度まだあれして。神官さんだから」というように地元の学間沢だけでなく外山や白土の方でも、宮司として名の知れた人物であった。この神歌本が外山神楽に贈られた経緯として、

昭和40年秋大兄外山神楽の方大木戸剛、菊池邦夫両君御来訪下され、今迄の神楽本は変体漢假名を用へ草書にて書れて、読み苦い所もありますので、これを楷書で書いて読み易くして頂きたいと申されました

とあり、従来使用していた草書の神歌本から、楷書の読みやすい神歌本にしてほしいとの要望で実現された。このこと



写真3 年号不明 白土神楽から伝授された神歌本
2022年筆者撮影

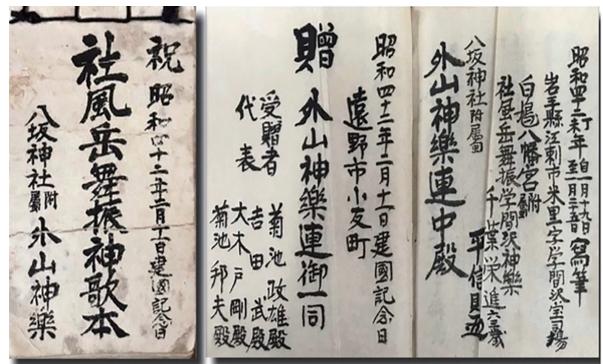


写真4 学間沢神楽・千葉栄進氏から外山神楽・菊池政雄氏へ贈られた神歌本 2022年筆者撮影

について菊池邦夫氏は「行ったことはあるのよ栄進さんの家さ。その歌本頼みさも行ったし、受けさも行ったし」と話しており、はっきりと記憶していた。神歌本の謄写した期間として、1967年（昭和42）1月19日～1月25日との記載があり、短期間に書き上げたものとわかる。いかにして神歌本を受け取ったのかということに関しては、菊池邦夫氏によれば「あのどぎ俺車持ってっから、3人乗りだながら2人乗って、剛さん武さんいるから…」と語り、誰と受け取りにいったのかは曖昧であったが、神歌本にあるように「受贈者 菊池政雄殿 代表者 吉田武殿 大木戸剛殿 菊池邦夫殿」との記載があるため、当日受け取りに向かったのは前述の人物達であるといえる。これらから、1965年（昭和40）～1967年（昭和42）の間には学間沢神楽との明白な繋がりがあった。しかし、これ以降の両団体のつながりを示す史料が確認できなかったため、おそらく最後の交流になっただろう。

5-2. 学間沢神楽の史料より

学間沢神楽の史料として、写真5の権現様がある。この権現様の胎内には、墨書で製作者と製作年月日が、

大正八年一月 和賀郡谷内村字田瀬 阿部長之助 彫刻
白鳩八幡大神

と銘記されていた。江刺市教育委員会(1981)には、「大正7年座元宅全焼、古代権現様及び白土神楽の伝書神楽道具の一部を消失」とあり、この権現様は火災後に作られたものである。庭元の高橋氏は「うちは1918年(大正7年)に自宅が火災にあって、それ以降、祖父から火の扱いに気をつけるように言われてきた」と話しており、火災があったことは明白である。さらに、この権現様から隣接する田瀬地区との関わりがわかる。権現様の幕には「白鳩八幡宮」の文字を中心に、顎の下に白鳩八幡宮の創始由来に関係すると考えられる「向鳩」の紋が記されている。

写真6は、1919年(大正8)に当時の庭元の高橋万左衛門氏が書いた神楽歌本である。万左衛門氏は、1915年(大正4)以来学間沢神楽の元締めとして神楽の伝承において重要な人物であった。この神歌本は学間沢神楽の中で、最古のものであった。表紙は「神楽本 岩手県江刺郡米里村学間沢神楽 大正八年九月拾五日」とあり、裏表紙には「江刺郡米里村字太田 高橋万左衛門 所持」とある。作成された年が1919年(大正8)のものであり、庭元の家が火災にあった翌年に書かれたものであった。ただ、参考にしたと思われる神楽歌本が



写真5 学間沢神楽権現様(内部に墨書あり)
2022年調査にて筆者撮影



写真6 1919年(大正8)に庭元・高橋万左衛門が書いた神歌本
2022年調査にて筆者撮影

見つからなかったため、この本がいかにして書かれたのかは不明である。同年に、写真5の権現様が田瀬村の阿部長之助氏によって製作されたため、両地域の繋がりから、田瀬の白土神楽の神楽歌本を謄写したと推測される。

写真7の神歌本は、1922年(大正11)陰暦2月上旬に千葉栄松氏(当時58歳)が白土神楽の神楽歌本を拝借して謄写した旨が記載されている。調査の際に、住民の千葉清美氏から「栄

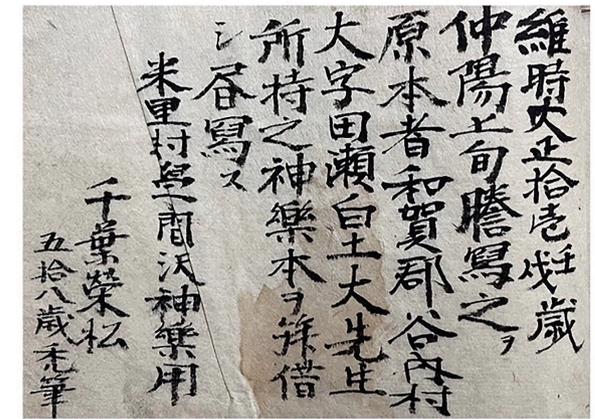
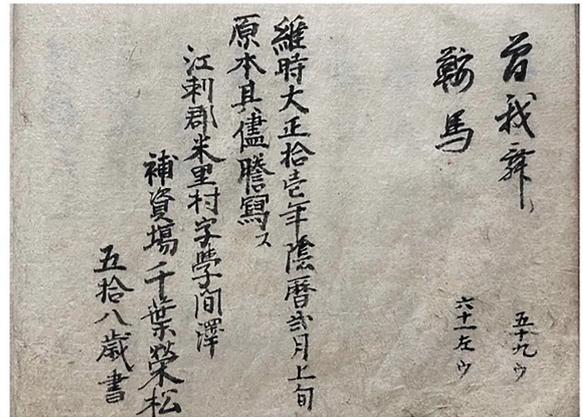


写真7 1922年(大正11)に千葉栄松が白土神楽の本を謄写した
神楽歌本 2022年筆者撮影

松さんは、本家の人で息子が栄進さんだった」と話しており、栄松氏と先述した栄進氏は親子であった。写真6と比較すると、白土神楽との関わりが明示されており貴重な史料といえる。

5-3. 聞き取り調査からわかる神楽衆の交流

白土から外山・学間沢へ神楽が伝授された後も、3団体での神楽衆の交流が聞き取り調査でより鮮明になった。

1948年(昭和23)に千葉栄進宅で3団体の神楽衆が一堂に会しており、実際に赴いたのは外山神楽の菊池秀雄・邦夫氏であった。菊池秀雄氏の「神楽はやらなかった気がする。そこで踊った記憶はないな」や、菊池邦夫氏の「踊ったの俺もわがねえな」という共通の証言から栄進宅で、3団体で神楽を演じた事実はなかった。しかし、師弟関係を再構築し、互いの絆を深め合うという点で、栄進氏が催したものが極めて意義のあるものであったといえる。菊池秀雄氏は「一緒に俺も踊ったごどねえな。康夫(西)さんのごろに来て白土の人たち踊ったことはあったな」と話しており、同氏は白土神楽との接触はなかったが、当時の白土、外山の神楽衆や住民の関わりが見受けられる。菊池邦夫氏は「栄進さんが連れてきて、外山と混じってやったりさ、外山で頼んだから栄進さんが連れきたかもしれね。外山さ行ったり来たりして何回かやったんだけど、栄進さんが年取ってしまってやんなくなっただけ、あどは来なくなったもんな。栄進さんが歩くうちは連れてきたども」と語っており、3団体で神楽を介した交流が行われたのが窺える。しかし、栄進氏が高齢になり歩けなくなると3団体での神楽衆との交流がなくなった。同氏は「白土の方から行くにいい人集めて、なんぼか学間沢でやってらったみたいだけど、それもダメになってきて、今度は外山さきて合流して神楽やったりしたんだ。そんな時だ、おらも五穀さ出はれて言われでさ、家で練習したやつと役違うわけ、白土からきた久子さんの親父、白土神楽の豊蔵という人あったんだ。その人が踊っているうちに俺の場所さばりきてっから、俺踊りづらくなったんだ。とつてもやりづらくて途途中でひっこまった」と述べており、当初は白土・学間沢でまとまり集団として機能していたが、次第に人数が減少し、2団体で活動するのも困難な状況になった。栄進氏が白土の神楽衆を率いて、学間沢の神楽衆と連携して神楽が行われていたが、次第に外山と合流して神楽をするようになった。そして、白土の豊蔵氏と一緒に舞った記憶がある同氏だったが、練習していた配役が豊蔵氏と被ったため

上手く踊れず途中で幕に入ったという。3団体で相互協力して活動をしているとはいえ、練習を一緒にしているわけではないので場当たりのになり、お互いの意思疎通や舞の共有はうまくいかなかった状況もみえてきた。さらに、同氏は学間沢の栄進氏、白土の豊蔵氏のことは認識していたが、それ以外に覚えている人がいるかという質問に対して、「あどの人だちわがねえもんな。今みてえに神楽一同に集まってやるずうごどねえがらよ。ながながな。毎年行って交流するわけでもねえし。何年かに1回行くがら頼まっちゃうなんて、都合いいどぎ何人行きますどがさ、みんなでねえんだっけもんな。あっちでもほら、あっちでもみんな集まっても、こっちがらはみんな行がねえだもん」と述べており、他の神楽衆に関しては認識していなかった。加えて、毎年3団体内で交流が行われたわけではなく、不定期にそれぞれの神楽衆を頼んでいたという状況で、神楽衆も全員集まったわけではなかった。したがって、一時的な人数補填にすぎなかったといえる。学間沢の千葉清美氏は「義亀さんの親父(今朝男)が亡くなった時、太鼓叩く人いねえがら、白土のきつおさんっていう人に太鼓頼んで踊ったごどはあったっけな。多田吉蔵っていう人だったな。みんなしてきつおさん、きつおさんって呼んでらった」と語っており、白土神楽の多田吉蔵氏が学間沢神楽の危機に向向っていた。同氏は続けて、「栄進さん亡くなった時に、息子の義登武さんが葬式で親父を神楽拍子で送るずうごどで、白土の太鼓叩き頼んだっけな。その時もきつおさんやったっけ。笛は梁川の人頼んだ。学間沢がら梁川の大滝ずうごどさ嫁ごさ行った君子さんっていだんだけど、その旦那さんは阿部清三ずう人だった」と話し、栄進氏の葬式を神楽拍子で見送ったことや、さらに前述した白土の吉蔵氏が太鼓叩きを務めるなど、吉蔵氏との学間沢神楽の関わりが深い事実があった。また、集落の親類を介して梁川の方から阿部清三氏が赴き、笛を吹いていたという発言から、3団体以外の繋がりがみられた。

5-4. 白土・外山・学間沢地域における婚姻関係

3地域における婚姻関係について千葉清美氏は詳細に語ってくれた。「白土の奥の家で山根(屋号)ずう家あつともあそごにいだじちゃんだが、外山がら来た人だったしな。あど、白土の大野ずう屋号の家もな。白土の君崎さんだかも小友がら来たずうごとも聞いたごどあるな。白土の菅谷進さんのお袋は江刺の学間沢のあだりがら嫁ごさ来たっけな。白土の鈴木みつ子さんだかも外山がら来たどがって。あど、

学問沢の日向(屋号)も外山がら学問沢さま来たはずだな」と詳細に話しており、多くの事例がみられた。地理的に近いという条件から互いの地域のつながりを示す通婚も多く行われたのがわかる。さらに、同氏は学問沢の出身であるのにも関わらず、白土や外山の婚姻関係についても詳細に把握していたため、地域間の深い交流があったのだろう。神楽も通婚を介した地域同士の結びつきから伝播し、それぞれに継承がなされたといえる。

5-5. 白土・外山・学問沢神楽におけるキーパーソンの存在

先述したように3団体の交流に関する発言を取り上げてきたが、3地域は古くから婚姻関係を介した地域間の交流が行われ、神楽もそのような条件下で接触がなされたと考えられる。加えて、3団体が互いに交流できた要因として千葉栄進氏というキーパーソンの存在が挙げられる。菊池邦夫氏の発言が主であったが、栄進氏が白土・外山・学問沢の3地域を行き来しており、精力的な活動をしていた。加えて、栄進氏が高齢のため出歩くのが困難になってから、それ以降の3団体内の交流は途絶えてしまったといえる。聞き取り調査の中で、3団体が交流をしたときには必ず栄進氏の名前が登場していた。三隈治雄(1976)は

民謡にせよ、民俗的な舞踊にせよ、それらの維持・伝承にあったのは、村なら村、部落なら部落といった地域共同体全員であるとするのが通説だが、しかし実際には、住民全部がつねに同等の芸能伝承の能力や情熱をもっていたとはいえない。かならずその中には、花田植の歌大工に似た、抜群の技能をもつ者、情熱をもつ者がいて、それが煽動して部落の芸能を活気あるものにしたのである。だから、そうした者のいない所では、芸能は急速に冷却し、伝承を枯渇させてしまう

と述べた。民俗芸能は地域の住民全員が維持、継承してきたというのが通説であるが、実際には住民全員が民俗芸能の伝承に対して同等の思い入れをしていいたわけではない。集団の中で際立つ技量を持つ者、また情熱を持つ者の存在があってこそ民俗芸能の継承を有意義なものにした。また、そのような存在がない地域の民俗芸能は衰えていく。したがって、千葉栄進という個人が、3団体の交流の核となり、自ら所属する学問沢神楽、または白土・外山神楽の維持までも図っていたといえる。しかし、栄進氏が亡き後、交流が途

切れ、白土、学問沢神楽の継承の雲行きが怪しくなった。栄進氏のような存在を喪失してしまったことは、3団体において大きなダメージであったろう。しかしながら、交流すると言っても3団体が集まって合同で練習する発言もなかったため、場当たりに神楽衆が集まって一時的な人数補填をしていたにすぎなかった。3団体内で交流し、舞を共有したのは紛れもなく事実であるが、しっかりと神楽が舞えたかについては疑問が残る。だが、3団体の交流において千葉栄進というキーパーソンの存在が大きな意義をもっていたことは確かである。

6. おわりに

本研究では、白土神楽とその弟子神楽である外山神楽、学問沢神楽についてとりあげ、現地での聞き取り調査と資料調査を行い、3団体の現状と過去について検討し、早池峰岳流神楽の伝播と継承の仕方についてあきらかにしてきた。図2より白土・学問沢神楽の事例から、限定された地域での活動、単体で芸能を維持するのは、現代において非常に困難である。図3のように、今後の民俗芸能の継承について師弟関係の「縦の繋がり」、加えて同流の他団体との「横の繋がり」を構築し、相互協力のもと継承活動を営んでいくことが必要になっていくと考える。しかしながら、縦の繋がり、横の繋がりだけでは継承が不可能になる事態が到来するかもしれない。従来の血族、地縁に関する人だけでなく、地域外の



図2 岳流神楽が継承された要因 筆者作成

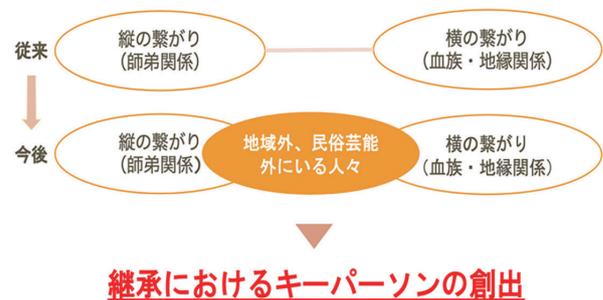


図3 今後の民俗芸能の継承について 筆者作成

能を維持していく必要があると考えられる。現在、少子高齢化などの問題から、地域での継承活動が困難になっている芸能団体も多く、白土、学問沢神楽のように衰退、または中断を余儀なくされる状況下にある。今後は、保存会が行政と連携し、民俗芸能の外にいる人々を、1人の担い手として創出していくことが重要だと考える。そうした民俗芸能、地域の外の人々が、今後の民俗芸能の継承を促進させる、1人のキーパーソンになりうるのではないだろうか。

謝辞

最後に本研究に関わり、多大な協力をして頂いた白土の菅谷ミキ氏、阿部久穂氏、菅原政二氏、外山の菊池秀雄氏、菊池邦夫氏、学問沢の高橋次雄氏、千葉清美氏、佛教大学特別研究所・中嶋奈津子氏など多くの方々に、感謝を申し上げます。また、本論の執筆にあたってご指導を頂いた、指導教員の松田俊介専任講師、岡陽一郎准教授に心より感謝を申し上げます。

参考文献・註

- 岩手県教育委員会(1997)『岩手県の民俗芸能—岩手県民俗芸能緊急調査報告書』岩手県教育委員会
- 岩手県教育委員会(2011)『岩手県の民俗芸能—岩手県民俗芸能伝承調査報告書』岩手県教育委員会
- 岩手県立図書館(2021)『企画展 いわたの神楽 展示資料目録』岩手県立図書館、p11. p14
- 江刺市教育委員会(1981)『江刺の芸能』江刺市教育委員会
- 熊谷保・加藤俊夫(1998)『北上民俗芸能総覧』北上市教育委員会、p.46
- 久保田裕道(2000)『早池峰神楽』福田アジオ他『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館、pp. 391 - 392
- 中嶋奈津子(2013)『早池峰岳神楽の継承と伝播 佛教大学研究叢書 18』佛教大学
- 三隈治雄(1976)『芸能の生き方—交流・伝播そして変容—』『芸能史の民俗的研究』東京堂出版、p. 40

「科白神楽」…南部神楽、仙台神楽、胆沢神楽などともいい、修験道廃止後、主として県南地方の農民たちの手で再構成された科白を伴う神楽。

「太神楽」…獅子舞や万歳、狂言などを中心とする伊勢太神楽や熱田太神楽の流れをくむ獅子神楽。

「その他」…上記の分類に該当しない神楽。江戸里神楽、法印神楽など。

² 「暮神楽」とは、神社に奉納するために幕を張り祈祷することを目的とする神楽で、演目には重要な儀式舞とされる式舞(鳥舞・翁舞・三番叟・八幡舞・山神舞・岩戸開舞)のほか、神舞・荒舞・武士舞・女舞に大別できる数多くの舞がある。

³ 「権現舞」とは、獅子頭の権現を神仏の化身として奉じて舞う舞で、災厄退散と豊穰を予祝して、神楽の最後に必ず行われる。

⁴ 花巻市教育委員会(2013 : p. 30)より宝暦9年(1759)、丹内山神社に早池峰岳神楽が伝えられたことが「神楽伝授書」に記されており、その後、明治初期の神仏分離の際、当時の宮司・小原実風が山伏神楽から仏教的な所作を取り除き、古事記による言立に改めて社風流の神楽を構成したとされている。

⁵ 芸事で言うところの家元の事。

⁶ 聞き取り調査より、千葉栄進氏が学問沢鎮座の白鳩八幡宮の宮司をしていた。

¹ 岩手県教育委員会(1997 : p. 189)では、神楽を次のように分類・定義している。

「山伏神楽」…権現様を奉じる神楽。

「大乘神楽」…山伏神楽と同様に権現様を奉じる修験流の神楽で、旧和賀地方に分布し、法印神楽の要素が強い。

「社風神楽」…旧盛岡藩領の社家神職が組織した神楽。